

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑫

まもなく終戦から77年。流)に乗せて、米国本土を今年も日本人が忘れてはな攻撃しようとした秘密兵器らない暑い8月が来た。である。本資料は2008

4 (近・現代)で模型展示している「風船爆弾」について紹介する。風船爆弾とは、直径10㍉の気球に爆弾をつるし、偏西風(ジェット気

文化

(平成20)年の特別展「愛媛と戦争」にあわせて、四国中央市紙のまち資料館の模型を参考に約11分の1スケールで製作した。千葉県一宮町、茨城県大津爆弾製造を3日遅らせたほか、オレゴン州でピクニックに来ていた神父の家族6人が亡くなっている。風船爆弾を製作していたのは女学生たちである。愛媛県立川之江高等女学校33回生の会による「風船爆弾

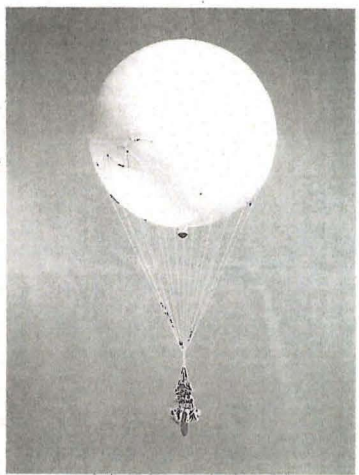
風船爆弾

兵器製作に女学生動員

風船爆弾は、1944(昭和19)年から翌年にかけて、

を思った日々(鳥影社、2007年)を読み返しながら、当時の聞き取り調査を思い出してみる。

1941(昭和16)年4月に入学した33回生は、44年6月末から9月初めにか



風船爆弾

に貼り合わせる気球貼りは、終日指で和紙をこする。ため血がにじみ痛みに耐えながらの作業だった。45(昭和20)年3月、風船爆弾作りは終了したが、33回生は専攻科に進み、終戦まで動員先を転々とした。

風船爆弾は、当時の女学生が兵器の製作に従事していたことの一例である。風船爆弾をこいたき戦争の悲惨さと平和の大切さを考える機会となれば幸いである。

(専門学芸員・平井誠)

〈随時掲載します〉